

今月の特選句・秀逸句」 / 「今月の滑稽句」

2011年2月
今月の特選句

風邪声を母が疑ふ電話口 母親なら、ホンモノの息子だということはすぐに分かるはず。 しかし、今後は念のため、オレオレ詐欺に備えて、親子間で パスワードを作ってみては。	守屋八郎
去年今年すべて初期化し初づくし 新年はモノゴトを初期化する。喧嘩していた奴から賀状が 来て、迂闊にも許してしまうとか、ダイエットに成功したのに 雑煮をおかわりするとか。	石川節子
剥く白身きみ抱きゐたる寒卵 白身が黄身を抱いているというだけのことですが、なんとも 艶がありますね。「黄身白身殻に籠もりて愛し合ふ」・・・ というわけですね。	藤岡蒼樹
飛び火するうわさ話の大焚火 噂も焚火も、飛び火することに気付いたのがいい。 「大炎上うわさ話の飛び火して」、その結果、 「大焚火消防自動車取り囲む」とならぬように。	澤田薫恵
飼主に似て夜遊びのうかれ猫 猫はご主人様に似る。また、逆に猫を見ればご主人様の 行状は、一目瞭然ということですね。なぬ？自分のところでは、 虚勢したから大丈夫？	永島董玉
接種して病院を出て大きくさめ A型を治療して、お土産にB型を頂いて帰宅、なんてことは よくある。この句の場合は、予防注射の効果がすぐに出たから ワクチンはホンモノです。	加藤 賢

今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

浮寝らの上下関係波任せ ・・・昇進したり降格したり	麻生やよひ
湯ざめして何やら損をせしやうな ・・・も一度浴びればガス代高む	稲沢進一
初笑てふつくり笑ひがテレビより ・・・去年録画をしたものばかり	川高郷之助
携帯と同行二人初詣 ・・・待ち受け画面のお大師さまと	ひがし愛
木枯しに泣く寒がりの雪女 ・・・なくさめんとて焚き火じや溶ける	池田亮二
風評を一喝したる大くしゃみ ・・・軽い噂は雲散霧消	柳 紅生
着ぶくれてゐても明らかヤセとデブ ・・・ヤセは厚着にデブは薄着に	前川敏夫
福引の景品やたら重いもの ・・・ダイエットにも効果あるかも	有富洋二
日向ぼこ省エネ大賞受賞する ・・・芯まで焼いては熱中症に	彦阪義久
焼餅は焼くべし餅は膨るべし ・・・焼くは人間膨るるは餅	高橋素子
生足のとろけ出したる炬燵かな ・・・まさかこんがり焼くつもりでは	森岡香代子
雑煮餅噛んで入れ歯と悟らるる ・・・その寸前にトイレで外せ	奥脇弘久
若き日はカンバ老いては寒波嫌ひ ・・・甲板上で乾パンを食ひ	前 九疑

今月の滑稽句

冬日浴ぶ田畑の隅に瓜横死 川上へ向くが好みか鴨並ぶ 深き水得意とせずには鴨は瀬を	青山桂一 青山桂一 青山桂一
冬至風呂むかしもらひ湯外廁 埋み火や戦後を共に生き寿ぐ 歌留多とり争ふ心隠しつ	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
ストレスてふ心の逃げ場冬籠り 掃き初めもやはりまあく済ませけり	麻生やよひ 麻生やよひ
座右の銘ころころ変わる雪なだれ バレンタインデー人生やり直す 闇の梅危険な香りではないか	足立淑子 足立淑子 足立淑子
初釣りの勢いあまり竿折れる 体力を持て余しての日向ぼこ	有富洋二 有富洋二
まだ生きてみるとばかりの賀状かな 大器晩成などと書き出す初日記 女難とは八十路のわれの初みくじ	有吉堅二 有吉堅二 有吉堅二
皺の手より艶やかな手に御年玉 願ひ事八百萬あり初詣 初賽銭神は和算で対応す	安藤淑子 安藤淑子 安藤淑子
出せば来ず出さねば届く年賀状 神の世も婚や離婚や里神楽 飛行機が墮ちて来さうな霜夜かな	飯塚ひろし 飯塚ひろし 飯塚ひろし
四日早や気は満ちたりしいざ出陣 あふひとごと同じ挨拶お正月 初詣願いは内緒あのねのね	井口夏子 井口夏子 井口夏子
独居孤ならず壺中天あり酒もあり 初暦時は律義に休みなく 煉炭ってなあにと訊く子は床暖房	池田亮二 石川節子 石川節子
休日の多き暦と暦売 こりん星とサンタを信じクリスマス 戦場の内緒の内緒の菓喰	伊藤浩睦 伊藤浩睦 伊藤浩睦
クリスマスカード真夏の国より来 元旦や自分の歳を柵に上げ	稲沢進一 稲沢進一
小銭にて願いの多し初詣 除雪して現る車吾にあらず 着膨れてプール通いやダイエット	井野ひろみ 井野ひろみ 井野ひろみ
女正月肩に大きな温湿布 残すべき賀状処分をする賀状 梅二月絵馬に貼られた黒シール	宇井偉郎 宇井偉郎 宇井偉郎
女湯に嬌声上がる柚子湯かな 重藤の強きに外し弓始 高齢は炬燵の穴を住処とし	宇佐美徹郎 宇佐美徹郎 宇佐美徹郎
寒卵コロンブスも食べたげな 溶けてゆく身の上案ず雪達磨 下萌のもたげて重き力石	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
こことても相場上りぬお年玉 ちやん付けの犬も老いたる冬帽子 恵方へと歩みぬらし道音痴	越前春生 越前春生 越前春生
おたがひに老いを慰む賀状増え 今日もまた惚けしままに寒四郎	奥脇弘久 奥脇弘久
鸞替のほんとの嘘とうその嘘 七日早や捻子を捲かるる古時計 魔法めく逆立ち独楽の妙技かな	笠 政人 笠 政人 笠 政人
ビルの角曲れば正面衝突北風と 部屋に籠り雪の気配を感じある 箱根駅伝たすき渡せぬ涙あり	加藤澄子 加藤澄子 加藤澄子

今月の特選句・秀逸句」 / 「今月の滑稽句」

愛すべしをみな冬の日除帽 たいくつな釣人にまた柳散る	加藤 賢 加藤 賢
折返す電話もくれで雪を掻く 忘恩も防怨もあり忘年会 花々もたたき売られて年の市	金澤 健 金澤 健 金澤 健
薄命も夭折もなし年迎ふ 元旦や又生き延びてごめんなさい 初恋のかれあぢさゐの如くなり	川島智子 川島智子 川島智子
煤逃の理髪終へしも駄弁りをり 柚子風呂に妻の島倉千代子かな	川高郷之助 川高郷之助
コンビニのイケメンサンタに会いに行く 誰がためのクリスマスかな釈迦の国 湯あたりの柚子ごろごろと仕舞い風呂	北村マコ 北村マコ 北村マコ
新米はおいしくもあり下手であり 七転びやっと五起きして師走かな すす払いすすを新たに入れ替へる	久我正明 久我正明 久我正明
本物の星を降らせる聖夜かな 金鈴子落ちてしまへりクリスマス 歪なる蜜柑詰め放題に売れる	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
暮敵のその手は食はぬ兎罌 新玉の下界見下ろす鬼瓦 人日やホームの人々列をなす	倉方 稔 倉方 稔 倉方 稔
獣医師の牛のくさめに糞まみれ 母牛より仔牛に来たる賀状かな 来るならば身を飾りこよ寒鴉	黒澤正行 黒澤正行 黒澤正行
去年今年跨って呑む大盃 初釜を二杯飲んでも良いかしら	黒田忠一 黒田忠一
子等みんな親にあずけて始め 獅子舞におひねりあれば音の高し 春大根夫婦を割いて占む座席	小杉 隆 小杉 隆 小杉 隆
井の上の海老天着ぶくれて 焚火などせねばよかつた寝小便 月給日海鼠になつて父帰る	小林英昭 小林英昭 小林英昭
何故でしょう「うさぎ」の数は一羽二羽 孫達にうさぎとカメの物語 思い出す亡母の好物うさぎ鍋	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
フィギュアの尻餅美味やスケート嬢 令嬢の豹変したるカルタ会 冷やかに女性の視線専用車	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
長寿と書く悪癖の年賀状 去年今年百円ショップの時計音 呑んべえの怠け始めや夜の雑煮	桜井宇久夫 桜井宇久夫 桜井宇久夫
金精へ似たり貝あげ年を越す 歌かるた十歳にして女の目 賽子が潜るこたつの御居処かな	佐藤古城 佐藤古城 佐藤古城
この時節は孫になりたいお年玉 誕生日ケーキより孫歌い出す 口達者されどオムツは教えない	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子
年賀状一年越しの往復便 年賀状二重に出したり忘れたり 虎よりも兎に飛躍空頼み	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
七転び八起がなくて雪ダルマ 大空へ風が掴んで尻上げる	澤田篤恵 澤田篤恵
寝正月屈託もなく生き残る 初夢の見しこと思ひ出せずして 初詣真面目くさつた顔をして	塩川雄三 塩川雄三 塩川雄三
海鼠噛む珍味に嵌り入歯欠き 躊躇して土に引導大根引く 諸侍腹に一物屁で二物	柴田真一 柴田真一 柴田真一

今月の特選句・秀逸句」 / 「今月の滑稽句」

今日も来ぬ喧嘩相手や日向ぼこ 異国語の値切り上手や年の市 老四人婆の家に来て雪下す	清水呑舟 清水呑舟 清水呑舟
風邪を引くほどには知恵もなかりけり あれこれと口を出しては懐手 脇に置く国語辞典や初日記	白井道義 白井道義 白井道義
メガネなどいらぬ熱々のラーメン AもBも私のメガネ日向ぼっこ カラスの高さ正月来てるだろうか	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
もくもくと指先すすむ毛糸編み ついであり祖母にたのまれ日誌買う 年忘れごくろうさんで酒進む	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
御降は天の声なりトタン屋根 初電話補聴器忘れ運不運 酒飲みの愚痴聞かされて嫁が君	高田敏男 高田敏男 高田敏男
世に拗ねてみて唐様の賀状書く 屁を零しそ知らぬ貌や年酒酌む 謡初子ら皆去んで仕舞ひけり	高田菲路 高田菲路 高田菲路
顔見世や最前列に並び居る 芽は上に整列させて慈姑煮る 洋風のアレンジメント門松も	高橋マキコ 高橋マキコ 高橋マキコ
湯疲れをして終ひ湯の柚子三つ 顔見世に顔向け出来ぬ立役者 三十年前はサンタになった夜	高橋 都 高橋 都 高橋 都
足袋履ひて孤独の破目に親指は 花咲じいじ枯木に光の花咲かせ	高橋素子 高橋素子
めでたさや変わらぬ日々の去年今年 ブロッコリー飛び立つごとく羽ばたいて 白菜の笑わぬように鉢巻す	高松雄三 高松雄三 高松雄三
踏切りを渡る獅子舞顔を出し 初夢や猫に抱かれて子守歌 押しあひし七福神は宝船	田中章子 田中章子 田中章子
元日の美人みみくそをほじくる 孤高にはなりそこねたる寒鴉 寒月や忍者のすべてを知つたる	田中 勇 田中 勇 田中 勇
前段の長き話や薬喰 病院の咳また咳を通り抜け 伊勢海老やええじゃないかと舌鼓	谷むつみ 谷むつみ 谷むつみ
初詣あまた願ひて五円也 ダリの絵の時計ぐんにやり去年今年 初夢の意味を問ひたしフロイトに	種谷良二 種谷良二 種谷良二
金要らぬ極楽浄土干蒲団 焼芋を買ひに行く役僮ばかり 気兼ねなく酒とつきあふ三ケ日	田村米生 田村米生 田村米生
厳寒と極暑の二季や去年今年 初釜に胡坐許さる半寿かな 十七の優先席の初鏡	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝
鬼瓦鬼は外にもこの余裕 挨拶は残る寒さを声にして	永島董玉 永島董玉
あの人の襟元眩し歌留多取り 飲んで寝て食うて寝て飲む三ケ日 寝正月付き合い良くて貧乏神	西をさむ 西をさむ 西をさむ
もの忘れを託つ面々年忘 マニュアルを探しさがして年迫る 引退のサンタクロース日向ぼこ	原田 嘩 原田 嘩 原田 嘩
煤逃げも戻つてをりぬ夜の卓 我よりも丈高き子へお年玉	ひがし愛 ひがし愛
夫婦間数式不変去年今年 歌カルタオ女の頬を張り倒す	彦阪義久 彦阪義久
凧揚げて足元忘れぬたりけり	久松久子

「今月の特選句・秀逸句」 / 「今月の滑稽句」

百円の切れて獅子舞後向く 賽銭箱に大き錠前山眠る	久松久子 久松久子
新札の折り目正しきお年玉 前髪を上手く収めて冬帽子 初電話まづよそゆきのあいさつの	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
客のなき元朝バスの運転手 ポマードに成人式のリーゼント	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
忘れたきこと満杯の忘年会 迎春の装ひ終へて未知を待つ 満載の感謝と悔恨古日記	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
落付いておれぬ連帯保証人 残り歯が二十わたしの宝物 早死にと手相はいうが喜寿迎え	古野セキエ 古野セキエ 古野セキエ
写真とるときはいた筈雪女郎 健啖と酒豪が揃ひ葉喰	前川敏夫 前川敏夫
カンパンも寒波も嫌ひ老いにけり 寒波逃げコンパの暖簾くぐりけり	前 九疑 前 九疑
落されずしがみ離れず去年今年 犬小屋に獣医の年賀貼りにけり 睦の月や睦言とかわす睦まじさ	松尾軍治 松尾軍治 松尾軍治
海老蔵も思ひ耽けるか百八つ ヒンズーもイスラムも居る初詣 初御籤吉とは有れど小出しなり	丸山紘一 丸山紘一 丸山紘一
やや過食過眠に過ぎぬ三ケ日 流行の先端の風邪ひきみたり 宝石を見せに初通院の人	三木蒼生 三木蒼生 三木蒼生
来ねばよいのに明日来ると雪女郎 饒舌が無口となりしたらば蟹 冬籠りなにはさておき腹八分	三塚不二 三塚不二 三塚不二
風花や生まれは石錠山八合目 好きな娘の胸をめぐけて雪合戦 着ぶくれを剥けばスタイル美人かな	村上美和 村上美和 村上美和
百八で足りぬ煩惱除夜の鐘 福引や婚活就活ままならず 屠蘇を酌む卒寿の父の底力	百千草 百千草 百千草
渋柿や甘さをふくみ垂下がり 除夜の鐘天空ゆるがせ風渡る	森岡香代子 森岡香代子
正月が近づき昭和遠くなり オトシ玉成人祝いで跳ねアガリ 白寿まで迎春心白くして	森 要 森 要 森 要
金貸しの目につかぬやう布団干す 釣銭が欲しくて去れぬ社会鍋	守屋八郎 守屋八郎
わき腹のどこぞをつまみ鏡餅 初乗りやタクシー五百六十円 初の字のとれ冬空にもどりけり	八木 健 八木 健 八木 健
ペンギンのやうに歩めるスケーター 亀のやうに首を伸ばして年の市	柳 紅生 柳 紅生
中味より馬鹿塗り重箱節料理 ハンモックひょうきん孫の初笑い たくましや対等親子の初スキー	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
長々となに願うのやら初詣で 日の出から喚くなよコラ！初鴉 年越して八日の卵やや匂う	山内重昭 山内重昭 山内重昭
炬燵日和昨日今日明日明後日と 炬燵出して我が居を得たり家土竜 ひなたぼこ覗いてみたき我子の夢	山下正純 山下正純 山下正純
初昔銀座カンカン娘逝く 人の日の土竜威しの鳴るばかり パソコンの言ふ事聞かぬ七日かな	山本あかね 山本あかね 山本あかね

今月の特選句・秀逸句」 / 「今月の滑稽句」

酔ひ止めの葉効いてる忘年会
河豚刺しのお代わり無しと釘さされ
走り来て落ち葉の山にもぐりこむ

山本けい子
山本けい子
山本けい子

八千公の前で新年おめでとう
霜柱にも大黒柱のあり
いちオクターブ高い声出しかるたよむ

山本 賜
山本 賜
山本 賜

煤逃げといふより住処追ひ出され
抱擁をぎくりとさせて木の実降る
季語の枠はるかに超えて扇風機

横山喜三郎
横山喜三郎
横山喜三郎

除夜の鐘ぶつや兔の如く跳ね
差し出しの人名欠けし賀状来る
風花や呆気なく巫女舞ひ納め

渡辺さだを
渡辺さだを
渡辺さだを